
幼児退行

L i t a l y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼児退行

【Nコード】

N0471B

【作者名】

L i t t a l y

【あらすじ】

僕たちは年を取る。いつかは死ぬ。ただそれだけの事だ。

僕は特別養護老人ホームでほんの短い期間だけれど、お年寄りの介護をした事がある。

認知症になったお年寄りのうち、少なくとも人がまるで自分が赤子か、

幼稚園児になったように振る舞い、言動するようになる。

彼らは誰かに相手をして欲しくてそんな事をするんじゃない。本当に、本当に深く心からあの頃に戻りたいと考えている。

3歳や4歳だった頃のように、

母や父の手であやし、抱きしめて欲しいのである。

彼らのその願いはとても強いものだ。

何ものにも変えがたい、どんな善意、悪意をも超越する理不尽なまでの母の愛を、

空よりも大きな父の手のぬくもりをその肌に感じたいと彼らは願う。

しかしもうそれを与えてくれる母も父もない。

彼らは意識の奥底へと沈んでいく。

記憶の中の母や父に会いに行こうとする。

そして彼らはある時に触れてしまうのだ。

その、失われたはずのぬくもりに。

父の手のひらの感触、母のやさしい匂い、自分だけに向けられた声、その全てを、ありのままに、鮮明に思い出すのだ。

まるでタイムスリップでもしてしまったかのように、かつて存在した100パーセントの風景が彼らの目の前に現れるのだ。

彼らはただひたすらにそれを追い求めるようになる。

まるで夏の虫が燃える火へ飛び込んでいくように。

肉体を犯され、意識を犯され、記憶を犯され、彼らはなおその灼熱の彼方に手を伸ばす。

その身を焼かれながら。

あつという間だ。

まともだったおばあちゃんが

家族の顔すら分らないほどに記憶の在り処を失うのなんてほんとうに、あつという間だ。

僕は夢を見た。

今日。

つい今さっき。

僕は一人暮らしをしてるんだけど、

その夢の中では家族たちとともに暮らしている。

2歳か3歳の頃の僕のまま。

夜の10時過ぎ。

部屋の電気は全てついていて、
僕らはとても和やかに語り合う。

母が母にしか作れない最高の手料理を作り、
父は早く食べたそうにその周りをうろろする。

きっとそんな夢を見てしまったのは昨日、
実家に帰ったせいだ。

夢にはもちろん続きがある。

語らいを終えて僕は風呂に入ろうとする。
すると父親と母親が風呂に入ると言い出す。
僕はもちろん順番を譲る。

しばらく経ち、母親や父親が風呂からあがる。
僕はいよいよ風呂に入ろうとする。

しかしさっきあがったはずの母がなぜか風呂にいる。
今からまた入るのだと。

ボケてしまってるのだ。

僕は「あなたはさっき入ったんだよ」と諭すのだけれど、母はがんとして聞かない。

こんな母じゃなかったのに、と僕は夢の中で思う。

家中の空気が悪くなる。

さっきまでの和やかな空気など無い。

僕は次の瞬間になぜか声を上げて泣いている。
この24歳の姿のまま。

なぜだかとても悲しかった。
悲しいんじゃないかって寂しかったのかもしれない。
とにかくどうにも涙を止められなかった。

父親が言う。

「男は強くなければ生きていけない。
やさしくなければ意味が無い」

分かってる。

そんなこと分かってる。

でもどうにも出来ない感情が僕の中で爆発する。

そんな僕を、母は他人に対してするような目で見る。

母の中にもう僕はいないのだ。

僕は泣きながら母にすがる。

思い出してよ、と。

しかし母は僕を思い出すどころか、汚いものを扱うように退けようとする。

僕のとても古い記憶がよみがえる。

きつと僕がまだ1歳とか2歳とか、本当に物心すらつかないほどの昔の記憶。

ぬくもり。

匂い。

質感。

父の声。母の声。

ほほえむ父の顔。

ほほえむ母の顔。

ああ、幸せだったんだ。

僕は泣きじゃくる。

いつか老人ホームでみた認知症のおじいちゃんやおばあちゃんのよう
うに。

気が触れてしまったように泣きじゃくる。

悲しくてたまらない。

寂しくてたまらない。

ねえ、あやしてよ。

あの頃みたいに僕の頬を、頭をその手で撫でてよ。

だだをこねる僕を寝かしつけておくれよ。

しかしそれをしてくれるはずの母は激しい憎悪の目で僕を睨みつけるばかりだ。

目が覚めた僕は涙ひとつ流してはいなかった。
その事に少し驚いた。

しかし、目が覚めて数分後、止め処ない涙が溢れ出す。
あれは夢だった。

実際の母はまだまだボケてもいないし、
幸せな風景を僕はこの目で見る事が出来る。
それなのになぜだか悲しくてたまらない。

あの頃のようにあやして欲しいのかもしれない。
分からない。

僕はこの夢で二つのことを思い出した。

ひとつは上に書いたような、

とても普段思いつくそうとして思い出せないような、遠い幼少期の記憶。

そしてもうひとつは老人ホームで僕が目にした風景の事。

ある老婆のもとに一人の男が訪れる。
老婆は「どちらさまですか？」と聞く。

男は答える。

「母さん、僕だよ」と。

男はその目にとても深い悲しみを湛えて微笑んでいる。
それでも気丈に振舞う。

僕らの前で、もう自分の名を呼んではくれない母の前で。

僕以外の介護士さんも彼に何かを言ってあげたそうだったけれど、
言うべき言葉などみつからない。みつかるはずがない。

幼児退行の結果自我が崩壊してしまった

認知症のおじいちゃんやおばあちゃんの気持ちに僕にはなんとなく
分かる。

それはとてもつらい事だ。

愛しい母や父の温もりに、もう二度と触れる事が出来ない。

記憶の彼方にいる父と母に出会ってしまったとき、
彼らはもう二度とこっちは帰ってこれなくなる。

どうにか引き戻す事が出来たとしても、

数時間後、数分後にはまたその記憶の世界に帰って行ってしまう。

自身に残されたわずかな人生と、記憶の中の世界。
彼等はそれを天秤にかける。

天秤はゆつくりと傾く。

彼らが「お父さん！お母さん！あうあー！！！！！！」
と叫ぶ様はまるで慟哭だ。

そしてそんな母親を見つめる、名前を失った息子。

僕には耐えられなかった。

だから逃げ出したんだ。

帰りの電車の中で僕はかつてないほど絶望をした。

あれが人生の最終局面に用意されたディナーなんだ。

どんな英雄も、資産家も、王様だってそう。

いつかはあなる。

実の母から忘れ去られた滑稽な小男になり、

あげくには自分も全てを捨てて記憶の奥へと沈む。

親父の言葉を思い出す。

男は強くなくちゃ生きていけない。

男は優しくなくちゃ意味がない。

僕はまだその強さも、優しさも本当の意味で試されてはいない。

それを試される場面が訪れた時、

僕はあの名前を失った哀れな小男のように、
気丈に振舞えるだろう

か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0471b/>

幼児退行

2010年12月25日07時41分発行